



本学教員が関わった本

## 地域協働による高校魅力化ガイド： 社会に開かれた学校をつくる

地域・教育魅力化プラットフォーム 編  
岩波書店、2019年6月

紹介者

中村 怜 詞  
(教育学研究科 准教授)

教育は誰のためにあるのだろうか。私が「教育魅力化」という言葉に出会ったのは7年前。隠岐島前高校に赴任した時だった。最初の教員研修で「教育は生徒と地域を自立させるためにあります。この島ではそのような教育を目指しています」と説明され、言葉にならないしこりが胸に残った。当初は「生徒を地域に縛り付けるために教育を利用するなんて許せない。自分は島前地域のために利用されているのか」という怒りすら感じていた。

しかし、5年間島前高校に勤務し、地域と協働して教育活動を実践した今は、怒りどころか感謝すらしている。中学校までいじめられていて不登校だった生徒がイキイキと学校に通い、周囲が舌を巻くようなプレゼンが出来るようになったり、他者との協働が苦手だった生徒が周囲を巻

き込んで自分たちのプロジェクトを実現させたり、多くの生徒の成長に出会い、魂を揺さぶられてきた。このような生徒の変容や成長は、奇跡のように思われるかもしれない。しかし、「教育魅力化」に取り組んでいる学校ではいくつもこのような事例が見られる。

「教育魅力化」とは何なのか。「教育魅力化」という言葉が徐々に市民権を得てきているが、この問いに定まった答えはない。地域ごとにどんな生徒を育てたいのか、どんな学校でありたいのか、互いに意見を出し合い、対話を重ね協働しながら紡いでいくプロセスこそが教育の魅力化である。約10年前に隠岐島前高校で始まった高校魅力化プロジェクトがその始まりになる。地域と共にあゆみ、地域と共に創る学校を目指し、学校

全体のグランドデザインや育てたい生徒像を地域と共につくった。それに合わせて次々と教育改革を進めていき、カリキュラムも再編成した。本土からフェリーで3時間以上も要する日本海の離島であるにもかかわらず、全国から入学希望者が集まり、生徒数はV字回復。クラス数も1学年1クラスから2クラスへと増え、教員数も倍以上になった。離島の奇跡として多くのメディアに取り上げられ、「成功モデル」として多くの視察団が現在も訪れている(ただし、島前地域は自分たちのことを成功モデルではなく「挑戦モデル」と捉えている)。魅力化の流れは全国の人口減少地域を中心に広がっていき、大きな成果をあげる学校が複数出てきた。

一方で、それに伴って聞こえ始めたことがある。「あの地域(学校)にはあの人がいるから。うちでは無理。」「事例を学んで真似たはずなのになぜ上手くいかないのか」といった声である。更に、「魅力化とは生徒募集をすること」「魅力化とは行政が教育に予算をつけること」と、魅力化の取り組みを一部だけ切り取った誤解や曲解も流布している。

「教育魅力化」の取り組みは、特定地域の特殊事例ととられる向きも

ある。しかし、全国でいくつもの魅力的な学校が生まれていることから分かる通り、これは一過性の特殊な出来事ではない。また、表面的な政策や制度だけ真似をしても成し遂げられるものでもない。成果を出している地域や学校は、現在までに膨大な挑戦と失敗、成功と挫折を経験し、紆余曲折を経るプロセスの中で「教育魅力化」を前進させてきた。本書は「教育魅力化」に挑戦するプロセスの中で蓄積してきた知見を記したものである。

平成30年に高校の新学習指導要領が告示された。その中で書かれている「社会に開かれた教育課程」では地域と学校でどのような社会を形成したいのかを共有し、そのような地域社会を実現し、担っていくために必要な資質能力を明確した上で、生徒を育てるための教育課程を地域と学校が協働して実現していくように書かれている。「教育魅力化」で目指すものと重なるところが大きい。そのため、本書は「社会に開かれた教育課程」を実現するうえでも示唆に富む。

本書は全5部で構成されており、まず、第1部では高校魅力化とは何か、何故今魅力化なのか、どのように地域と協働するのかを扱う。第2

部では学校を地域・社会に開く意義を述べたうえで、地域のキーパーソンたちとどのように繋がって協働していくのか、地域と学校を接続するキーパーソンである「コーディネーター」について述べる。第3部では、地域社会に開かれた学びをいかに実現させるかを扱い、カリキュラムの編成、教科ごとの実践、部活動や個人プロジェクトの探究などの課外活動に至るまで、理念を具現化した学

びの在り方を述べる。第4部では、越境的な学びや多様性を生む仕掛けとしての「地域未来留学」を紹介し、第5部では「教育魅力化」という動きをどう評価して次に繋げていくかを述べる。

地域と連携することが目的化し、多忙感を増す原因になっている学校も全国に多くある。本書がそのような人たちにとっての道しるべになることを願う。

